

いる場面だが、「ゴージェルの下」という特殊な場所が一首の核になっていることに注目した。ゴージェルの下の目は他者には見えない、気づかれぬ部位であり、いくら痒くても自身で掻くことができない。だれにも気づいてもらえない、自分だけの苦戦をうたっている。ややユーモラスな味が読める点が持ち味。

亡夫は髭を朝も夕べも撫で揃へ夕光羽織りておかまのバーへ
西川和榮

不思議な、どこかあやしげな感じのこの一首を読んだ、作者の夫君だった西川十紫緒さんのことをひさびさに思い出した。お医者さんで、「心の花」の会員で、よく酒を飲まれる方だった。「心の花」の歌会や酒席で何度も一緒にいたのを思い出す。この作にぴったりな不思議な雰囲気の方だった。

恐竜の背中のような橋が見え隅田の岸に夏は来にけり
山崎波浪

橋は、恐竜橋とも呼ばれている東京ゲートブリッジだろう。二〇一二年にできて新しい風景となり、それから数年たって、ようやく隅田附近の日常の風景となった感じをうまく表現している。

子の御飯茶碗は祖父のお手製で茶碗びつたりの手には育つ
黒田郷子

人間の手と御飯茶碗の関係を逆転して表現して見せた意外性に注目した。因果関係をさかさまにとらえて見せた面白さ、と言い換えていいだろう。意味や関係性を正確に伝えることが第一の生活の言葉とちがって、詩の言

葉は、事実よりも事実の向こうにあるものを表現することが大切な場合もあり、正確さよりもインパクトの強さが求められる場合もある。

空っぽのプールの底にも思い出がへばりついているサヨナラみんな
西村三智

卒業生を送った教員の作、と読んだ。作品ができた今は、卒業期の三月だからプールに水はない。しかし、プールに水は無くとも、思い出はそこにもある。口語を基調にしたリズムも、いい。

流れゆく時に区切りをつけるのは私でもよしえいつと起きる
和田理恵

朝、なかなか起きる決心がつかずうつらうつらしている場面。このままもう少し寝ていたいな、寝ていようか。そんな数秒間をうまく言葉化してみたまの白いホテルの二割

さくらさき今年も届くさいたまの白いホテルの二割引券
服部 崇

毎年春に桜が咲くように、ここ何年か毎年割引券が送られてくるのである。宿泊したことがあるのか、あるいは何かかわりをもっているのだろうか。読者には分からない。が、何かの物語の存在が読める。リズムのいい下句が魅力的。

岩魚焼く露店のけむりを浴びてをり武州中川古木のさくら
藤田紀美子

何度か口ずさみたくなるような、とくに下句、切れのいいリズムが魅力的。地図を見ると、秩父鉄道に武州中川という駅がある。しだれ桜の名所らしい。